

京人形いろいろ

江戸時代には、雛人形のほかにも、さまざまな人形が誕生しました。その多くは、ここ京都が発祥の地と考えられています。



立雛 次郎左衛門雛 京都国立博物館

雛まつりと人形

京人形を楽しむための鑑賞ガイド

特集展示 雛まつりと人形
2026年2月7日(土)～3月15日(日)
平成知新館(1F～2)

雛人形を飾つて女子の成長を祝う雛まつりは、古くから行われているように思われがちですが、人形を飾つてこの日を祝うようになったのは、江戸時代の初めとされています。

雛まつりの起源は、上巳の節供という三月のはじめに行われた祓いの行事です。そこでは、紙など簡素な素材で作られた人形が、穢れを引き受ける人間の形代として用いられていました。それがやがて、同じく三月三日頃に公家の女子たちが行っていた盛大なお人形遊びである雛遊びと結びつき、江戸時代には、飾るための豪華な雛人形へと変化してきました。

江戸時代の雛人形には、その時代の元号を冠して呼ばれる寛永雛・享保雛や、製作した人形師の名にちなむという次郎左衛門雛、江戸で完成した古今雛、公家の装束を正しく写した有職雛などがあります。

本年は、恒例となっている関西風の御殿雛飾りにいたる雛人形の変遷と、各種の京人形を展示するほか、雛人形を通して表現された天皇と皇后の姿の移り変わりに注目します。江戸時代の人々が漠然と抱いていた天皇のイメージが托されたものから、写真などを参考にその姿を正確に写そうとした明治時代以降の品まで、いつの世も憧れのまなざしをもつて、大切に守り伝えられてきた雛人形の諸相をお楽しみください。



御所人形 春駒持ち 京都国立博物館

御所人形 ごしょにんぎょう

木彫りに胡粉を塗り重ねて磨き上げ、三頭身のあどけない幼児の姿を写した人形。明治時代以前には、その白く美しい肌から白菊、あるいは白肉、頭の大きなところから頭大、扱った人形問屋の名前から伊豆藏人形などと呼ばれていました。初期には子どものあどけない仕種を写すのみでしたが、やがて組み合わせて物語や場面を表現するようになりました。



衣裳人形 いしょうにんぎょう

衣裳をまとった胴体に、頭部や手先を加えた形式の人形。子どものかわいらしい仕種を写したものや、婦女・遊女・若衆などの風俗を写した浮世人形、能の舞台姿そのままの能人形などがあります。

衣裳人形 婦女立姿
入江波光コレクション・入江西一郎氏寄贈
京都国立博物館蔵



賀茂人形 かもにんぎょう

柳や黄楊を素材にした小ぶりな木彫りの人形で、顔や手足は木地を生かし、衣服には縮緬や金襴などの裂を木目込んでいます。こまやかな刀さばきをみせる顔と、着衣の裂とが調和し、素朴な味わいがあります。賀茂人形の主題は多様ですが、いずれも明るく楽しい表情に満ちています。



賀茂人形 七福神

長い年月を生きている人形には、汚れや傷みがありますが、人形の重ねた歴史の重みとしてご鑑賞ください。

